



# この一冊

Vol. 117



当会会員 渥美 央二郎 (51期) ●Ojiro Atsumi

これだけ文明や科学技術が発達を遂げる一方で近年は熊に人が襲われて怪我をしたり命を落としたりするニュースが後を絶たない。都会に暮らしていると人間が自然をコントロールしているように錯覚してしまうが、現実とは異なる。自然を相手にした場合には、人間は無力である。

本書は、簡単にいえば、マタギとして秋田県に生まれた松橋富治の壮絶な人生を描いた物語である。秋田県阿仁地方の奥まった寒村に生まれた富治。村ではもともと耕作地が不足していたのと、明治政府によって公布された地租改正令の影響で多くの村人が田畑を失ってしまった。通常は離村や廃村という流れになるようなのだが、阿仁地方の集落を救ったのは山の恵みであり、集落において生きるために必要な現金収入をもたらしてくれたものは山に棲む獣たちであった。富治の生まれた集落では冬場はマタギとして獲物をとる。オコジョやノウサギをはじめ、ムササビやテン、タヌキやアナグマ、さらにはサルも獲物になる。その中で、最も大きな収入源となるのが熊とアオシシ（ニホンカモシカ）であった。物語は

## 『邂逅の森』



熊谷 達也 著  
文春文庫  
832円(税込)

マタギによる熊の狩猟の話を中心として展開していく。

本書ではマタギの伝統的な狩猟の方法が実際の物語の中で紹介されている。狩猟の方法、役割分担、伝統的・宗教的な儀式についても触れられている。様々なマタギのしきり（中にはユニークなものもある）はとても興味深い。

富治はマタギとして次第に成長していくが、その人生は決して順風満帆とはいえない。ある事件があってマタギから離れることとなるのだが…（ここから先はあまり書きすぎない方がよいであろう）。

本書のテーマは、自然に対する畏敬の念であると書評等では紹介されているが、テーマは読む人の置かれた状況によって異なってくるように思

われる。人間と自然、時代や社会の変動、友情、男と女、愛と性など様々なテーマが複雑に絡み合っている。多くの登場人物の人間性には光と影があり、主人公である富治においてもその例外ではない。その中で一貫しているのが富治の素朴で実直な性格であり、本書を読み終わるまでには富治の人間性が好きになり、なぜか富治のことを応援してしまう。後輩の女性弁護士に本書を貸したところ、富治の性格に惚れこんでしまった。読み終わって2年ほどの間、「マタギと付き合いたいので紹介してほしい」等と本気で言っていた。

ちなみに、本書は第131回直木賞と第17回山本周五郎賞をダブル受賞している。作者である熊谷達也氏は熊をテーマにした本を多数執筆している他『相剋の森』『氷結の森』という題名の本も書いている。これらは「マタギ三部作」とか「森三部作」と呼ばれているらしい。これらの三部作は時代や内容が少しクロスオーバーしている部分があり、三冊いっぺんに読んでも面白い。 